

Working Paper Summary

JICA-RI Working Paper No.192

(2019年3月刊行)

Obtaining a Second Chance Education in Post-conflict Rwanda: Motivations and Paths

Miho Taka

Research Project: [失われた教育機会の回復：紛争中および紛争後の教育に関する研究](#)

■付加価値

本論文では、紛争や人道危機状況に起因する不就学児童・生徒の問題と、セカンド・チャンス教育 (SCE) の意義に焦点をあてている。1990年代以降、継続する紛争によって人道危機が長期化。それに伴う不就学児童・生徒の増加が、国際社会の注目を浴び、緊急時教育 (EiE) への支援が強化された。しかし、こうした努力にも関わらず、紛争影響下では、多くの学齢期児童・生徒が就学機会（特に中等教育レベル）を失い、SCE を得る機会も無いまま学齢超過者となっている。本研究の付加価値は、EiE に関する議論と研究において見過ごされている学齢超過者と SCE に注目し、エビデンスを提供したことにある。また、ドナーや教育関係者の視点を主とする EiE 研究分野において、学齢超過者として SCE の機会を得た人々も分析対象とし、彼らの経験と視点から SCE に対する動機と SCE の達成条件を検証した。

■リサーチ・デザイン

紛争により、多数の不就学児童・生徒の問題を経験したルワンダの事例を、文献および現地調査により分析した。1994年の虐殺およびそれ以前の紛争により不就学となり、虐殺後に学齢超過者として SCE を達成した人々を対象に、23件のライフストーリー・インタビューを行った。同インタビューをもとに、教育機会を失った背景、虐殺後のルワンダで SCE を達成できた経緯、そして SCE を望んだ動機を、定性的研究手法、特に解釈的手法を用いて分析した。また、SCE 関係者および教育関係省庁とドナーへの準構造化面接（事前に質問を用意するが、状況に応じて柔軟に対応する）を実施。SCE を取り巻く背景を調査して、クロスチェックした。

■主な結論（政策的含意を含む）

虐殺以前のルワンダにおいては、教育が社会や人々を分断する政治闘争に利用された結果、教育機会を奪われた人々が多く存在する背景が明らかになった。調査対象者は、虐殺以前に不就学となったグループと虐殺とその影響から不就学となったグループに分かれる。この2グループは、主に A レベル認定試験とキャッチアップ・プログラムにより SCE を達成している。SCE への動機については、「コグニティブ・リワード」（知覚・記憶・推論・問題解決などの知的活動がもたらす喜び）といった内的動機や、技術・資格・生計の取得、規範的価値、様々なダメージからの修復といった外的動機が浮き彫りになった。政策的含意は、まず SCE を達成した人々の経験の検証に基づく、SCE によって正規小中学校教育を修得するための経路や必要条件の示唆である。次に、ドナーが重要視する技術・資格・生計の取得という教育の目的は、学齢超過者が持つ多様な教育への動機のひとつでしかないということである。こうした SCE 修了者の経験や視点は、これまで EiE 分野では見落とされており、今後の EiE の実践に重要な意義と示唆を持つと考えられる。